

埼玉古墳群出土埴輪と土師器の新資料

若 松 良 一

はじめに

行田市埼玉在住の坂本雄誠氏は埼玉古墳群から出土したという埴輪類を採集し保管されている。拝見させてもらったところ、その中に動物埴輪の頭部などを含んでいたもので、出土地が確実であれば、埼玉古墳群を研究する上でも有効かつ貴重な資料となるのではないかと考えていた。今回、坂本氏の御理解と御協力を得て、資料報告をさせていただくこととなった。

整理を進めていくにつれ、いくつかの破片が接合し、図抜けて大型の円筒埴輪に組み上がるものがある一方で、それとは対局にある小型円筒埴輪があり、胎土・焼成・色調等も何種類かに分類できること、形象埴輪も種類が多いことなどが明らかとなってきた。

そこで、当館調査の出土資料と比較しながら、資料の分類を行い、実測図の作成を進めていったところ、それぞれの所属候補古墳をある程度推定できるまでになったので、坂本雄誠氏にお願いして、資料の採集場所と採集状況等の聞き取り調査に協力していただいた。坂本氏は注記をしておかなかったことを残念がっておられたが、記憶は鮮明で、小破片を別とすれば、ほとんどの資料の採集場所とその採集状況はもちろん年次まで記憶されていた。そしてその記憶は分類との整合性を有していた。資料の帰属古墳が明らかということは最重要の要件であり、これが確実であれば、埼玉古墳群の研究に益するところは大きく、資料を公表しておけば、さきたま資料館にとって裨益するところが大きいだけでなく、データを研究者共通の財産として利用してもらうことが可能となる。とくに今後しばらくの間は発掘調査の見込みのない古墳の資料は研究の停滞を救う一助となるし、たとえ発掘が行われるとしても形象埴輪などは同一個体は出土しない可能性が大きく、やはりかけがえのない資料ということになる。

資料報告に当たっては、特徴を明らかにしえない細片を除いてすべての図化を行い、あわせて写真を掲載することにした。

I 資料報告

1 稲荷山古墳出土埴輪

第1図1から3は昔、稲荷山古墳周辺（第4図A範囲）から坂本氏の親戚の子供（小学生）が拾って持ってきたものと考えられるという。1については記憶が薄いようだが、形態と調整技法から稲荷山古墳以外は考えられない。

円筒埴輪（第1図1）

残存率25パーセントのものを復原実測した。最上段と凸帯を挟んだ下段の一部が残存している。寸胴な器形を示し、最上段は直線的に僅かに開く。復原口径は37.6cm、残存高は18.5cmある。口縁

端部は粘土紐を貼り足して外方に屈曲させている。端面は強いナデによって凹線を形成し、両角が鋭く尖る。凸帯は14cm下方に付けられており、断面形は上辺の高い台形を呈し、突出度が高い。幅が狭く、強いヨコナデによって上下と側面が内湾して2本の稜線が巡るため、非常にシャープな印象を受ける。

成形は粘土紐巻き上げで、凸帯裏側と口縁端部外面とに接合痕を残す。製作工程における乾燥単位と推定できる。外面調整は左上りのナナメハケ調整（工具は幅4.2cmに19条のハケメ）で、最上段では、左上りのヘラナデを疎らに加えている。凸帯の貼付け及び調整後に、下段では2次調整として横位のヘラナデを加えている。原体は板状であるが、ハケメがないので、板目（年輪に対して直交方向の端部を使用）と見ることもできる。浅く細い条線を伴う。簾状文のように止めながら施しており、B種ヨコハケに類似する。内面調整は左上りのナナメハケ調整（工具は幅2.6cmに13条のハケメ）で、凸帯裏では指押えの後ヨコナデを、口縁端部では2段のヨコナデを加えている。

胎土には細礫と粗砂を多量に含み、チャート礫・白色パミス・軟質凝灰岩礫（径18mm）・砂岩礫が観察される。焼成は良好で、堅緻。内面は還元がかっている。色調は外面が淡黄褐色、内面が淡褐色を呈する。

最終工程で、外面の全面に赤色彩色を施す。暗橙色の顔料である。口縁部外面の一部には、これとは異なる暗赤褐色（あずき色に近い）の顔料が重ねられており不規則に撫でられているが、内面では垂れるに任せた状態であり、容器に入っているか刷毛に含みすぎた塗料を誤ってこぼしてしまったものと想像される。外面のナデはそれを拭き取ろうとした痕跡の可能性が高い。内面に垂れた顔料は還元によって黒色を呈している。

なお、最上段外面に篋先による線刻記号の一部が残存しているが、「×」とみて誤りないだろう。

動物埴輪頭部（第1図2）

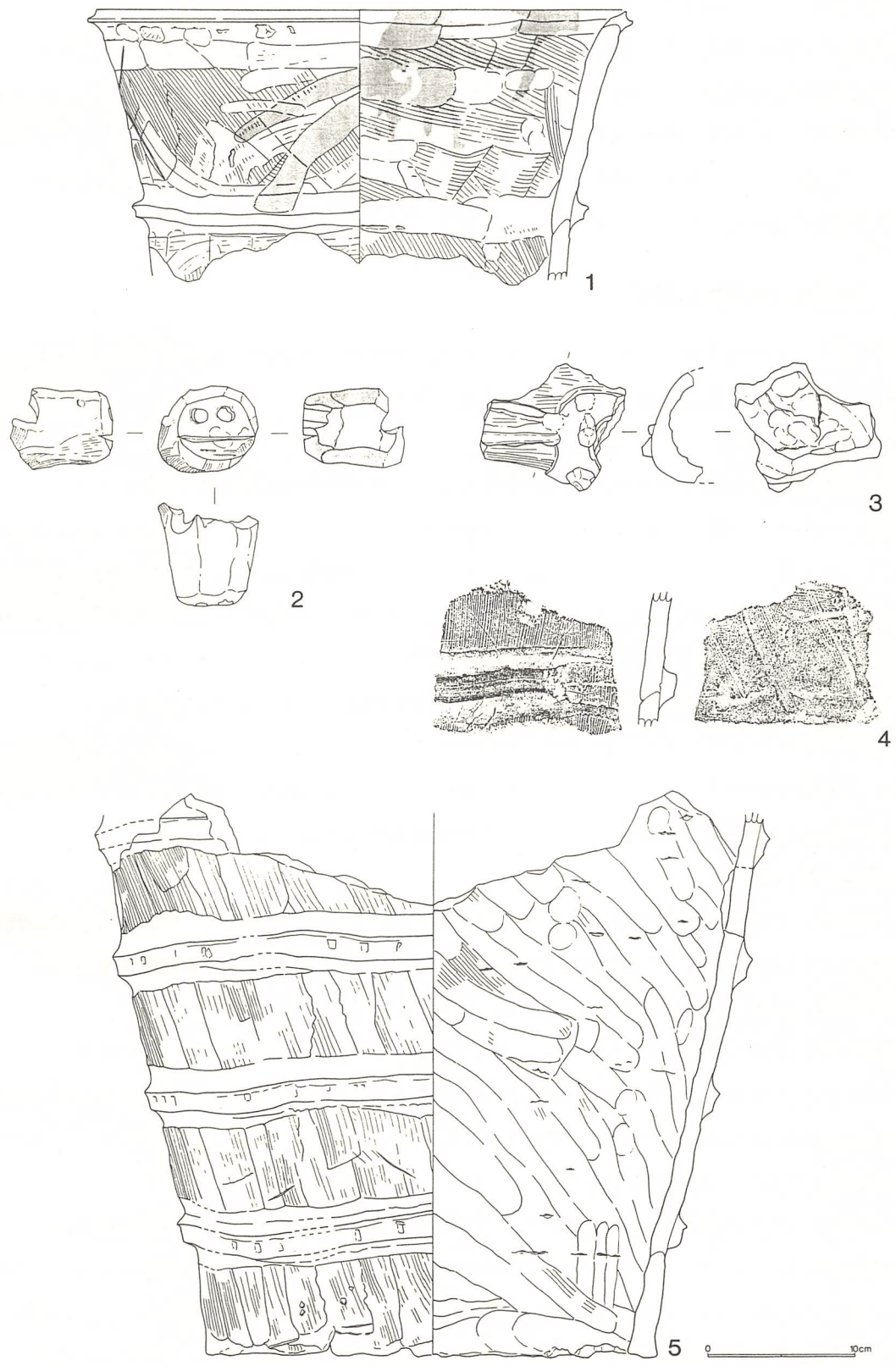
口先がややすぼまる円筒形に作られ、口先は粘土で閉塞されている。外面からの竹管刺突で鼻孔を、また、ヘラ切りで口を示す。目はヘラで半円形に切り取っているが、まなじりが少し上がっている。残存法量は幅6.8cm、長さ6.9cm、高さ5.6cmである。

成形は幅の広い粘土紐を首の方から口先に向けて一段ずつ継ぎ足して行い、最後に粘土塊で塞いで鼻面とする。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。外面調整はハケメの後、ナデ調整を加える。内面調整はユビナデである。鼻面部は叩き具（平行叩き目有り）で叩いた後、ヘラケズリを加えて平坦に仕上げている。

胎土には細砂・白色パミス・雲母・小礫を少量含む。焼成は堅緻で、明赤褐色を呈する。馬具の装着表現はなく、非常に小型であることから、馬とは考えられない。鹿かと推定するが、角部が残存せず、決め手を欠く。また、犬の可能性も考えられるが、牙の表現はなく、これまた決め手がない。非常に小型の製作であることが留意される。

馬形埴輪頭部（第1図3）

馬の頭部右側面部で、口先付近に当たる部位である。粘土板を貼り付けてf字形鏡板が表現されている。その周縁部には粘土粒を貼り足しており、ヘラ切りによる鈴口の表現はないが、鈴の表現かと思われる。2箇所が残り、脱落痕が2箇所ある。鏡板に接して2本の粘土紐を貼って面繫と手



第1図 稻荷山古墳・丸墓山古墳出土埴輪実測図（1：4）

綱が表現されている。鼻面部は残存していない。現存長10.0cm、現存幅8.2cmである。

横断面形は下側が平坦となる楕円形であり、幅4cmほどの粘土紐を首から鼻先方面に向けて輪積みを読み返しながらか成りしている。外面調整は粗いハケメ（工具は幅1.6cmに7条のハケメ）、内面調整は雑な指ナデのみで、輪積み痕と指押え痕を残す。

胎土には白色パミス・雲母・細砂・チャート細礫を少量含む。焼成は普通、色調は橙褐色を呈する。復元径は8cmほどであり、馬形埴輪としてはかなり小型の部類となる。

2 丸墓山古墳出土埴輪

第1図4と5は坂本雄誠氏が昭和40年頃、丸墓山古墳の墳丘中段テラス部（第4図B地点）にて採集したもので、小さな穴があって、その周囲に散布していたという。

円筒埴輪（第1図4）

曲率からの復原では直径31cmの大型円筒埴輪となる。粘土紐の接合痕が凸帯裏にあり、乾燥単位と凸帯貼付け位置が一致する例である。外面調整は左上りのナナメハケ（工具は幅3.2cmに24条のハケメ）で、下の段から凸帯下をくぐって施されている。2次調整はない。内面調整も左上りのナナメハケで、さらにユビナデを加えるが、不十分で、ハケメが多く残る。ハケメ工具幅は5.0cmあるが、おそらく外面と同一のものであろう。外面ではハケメの切り合いのために工具の幅が不明であったのである。凸帯は断面形台形で、突出度は高く、ナデ調整も丁寧である。剥離部分にはヘラ先による凹線が水平に引かれており、目安線と考えられる。

胎土には粗砂をやや多く含み、チャート礫・白色パミス・酸化鉄粒・雲母が観察される。焼成は極めて良好にして堅緻で、赤褐色を呈する。生出塚埴輪窯の製品と推定される。

円筒埴輪（第1図5）

6片が接合して反転実測が可能となった。残存率は45%である。底部から第4凸帯までが残存する。復原値は底部径31.0cm、上端での最大径45.6cm、残存高37.6cmである。基底部は真円ではなく、復原短径31cm、同長径34cmの楕円形を呈する。実測は短径の方で行った。

器形は上部に向かって直線的に開くもので、その度合いが大きい。ただし、残存状態の一番良い部分の開き具合が大きく、その断面を反転実測したために開きが増幅された可能性もありうる。凸帯貼付け位置はほぼ9cm間隔であり、各段の長さが均等であるが、直径の割に段が短い。器肉は平均1.2cmの厚みであり、大型品の割に薄手といえる。

成形は幅7.0cmの粘土板を丸めて基部とし、それ以上の部分は幅2から3cmの粘土紐を巻き上げている。外面調整は左上りのナナメハケ（工具は幅4.2cmに29条のハケメ）で、そのストロークは17cm前後あって、凸帯の下をくぐっている。凸帯貼付け後の2次調整はない。原体はハケメの浅いもので使い始め段階のものと推定できる。内面調整はナナメハケの後、斜位のユビナデで、比較的丁寧にハケメを撫で消している。部分的に接合痕が残り、凸帯裏には指押え痕がある。おそらく、大型品でもあるために各段ごとに乾燥を行い内面はその都度ハケ調整を施したと推定されるが、ユビナデはストロークが長いので、第3段まで積み上げた段階で第1回目のユビナデ調整を行い、さらに3段ほど積み上げた段階で第2回目のユビナデ調整を行ったものと推定できる。

凸帯は断面形M字形で突出度は比較的高い。水平に貼られておらず、ヨコナデ調整も不十分である。凸帯側面に一辺6mmの方形の窪みが多数残るが、これらは凸帯を器面に圧着する際に、断面形方形の棒状工具で突いた痕跡と考えられる。ナデ調整の不十分な部分にこの痕跡は顕著である。

透孔は第4段にのみ1箇所残存するが、第3段まではなかったと見て誤りない。段間が狭いため、復原直径5cm程度の小さな円孔となっている。対向して1対が穿孔されたと推定される。

胎土には小礫から細砂を多量に含み、チャート礫・酸化鉄粒子・白色パミス・少量の雲母が観察される。焼成は良好だが、内面はやや軟質である。色調はくすんだ橙褐色を呈し、器肉は灰褐色である。黒斑はなく、窖窯焼成品と見てよい。なお、底面には篠状の圧痕が認められる。

3 愛宕山古墳出土埴輪

坂本氏が現在地に転居し、父親が旧居宅を建てた昭和30年代に、自宅の庭で採集した資料である。この地点（第4図C地点）は愛宕山古墳くびれ部東側の内堀から外堀部分にあたる。昭和56年度の調査成果からみて、墳丘及び中堤から堀の中に転落した埴輪であった可能性が高い。

円筒埴輪（第2図1）

残存率15%の小破片のため拓影図を掲載した。凸帯位置の曲率からの復元径は28.0cmである。凸帯は剥離しており、貼付け面の上端に幅5mmの凹線が水平に引かれているので、目安線と考えられる。外面調整はタテハケ（工具は幅2.3cmに19条のハケメ）、内面調整は左上りのナナメハケ（工具は幅2.5cmに23条のハケメ）である。

胎土には細砂を少量含み、チャート・白色パミス・酸化鉄粒が観察される。焼成は少し軟質である。色調は淡赤褐色だが、器肉は暗灰褐色を呈する。

円筒埴輪（第2図2）

残存率15%の小破片のため拓影図を掲載した。凸帯上部の曲率からの復元径は25.0cmである。外面調整はタテハケ（工具は幅3.2cmに20条のハケメ）、内面調整は左上りのナナメハケである。凸帯の断面形は低台形で、上稜が突出するため三角形に近い。凸帯そのものが水平に貼られておらず、波打っており、ヨコナデ調整も雑である。上段には円形透孔の一部が残る。

胎土には砂粒をほとんど含まないが、白色パミスと微量の雲母が観察される。焼成は須恵質で、良好にして堅緻。色調は灰褐色を呈する。

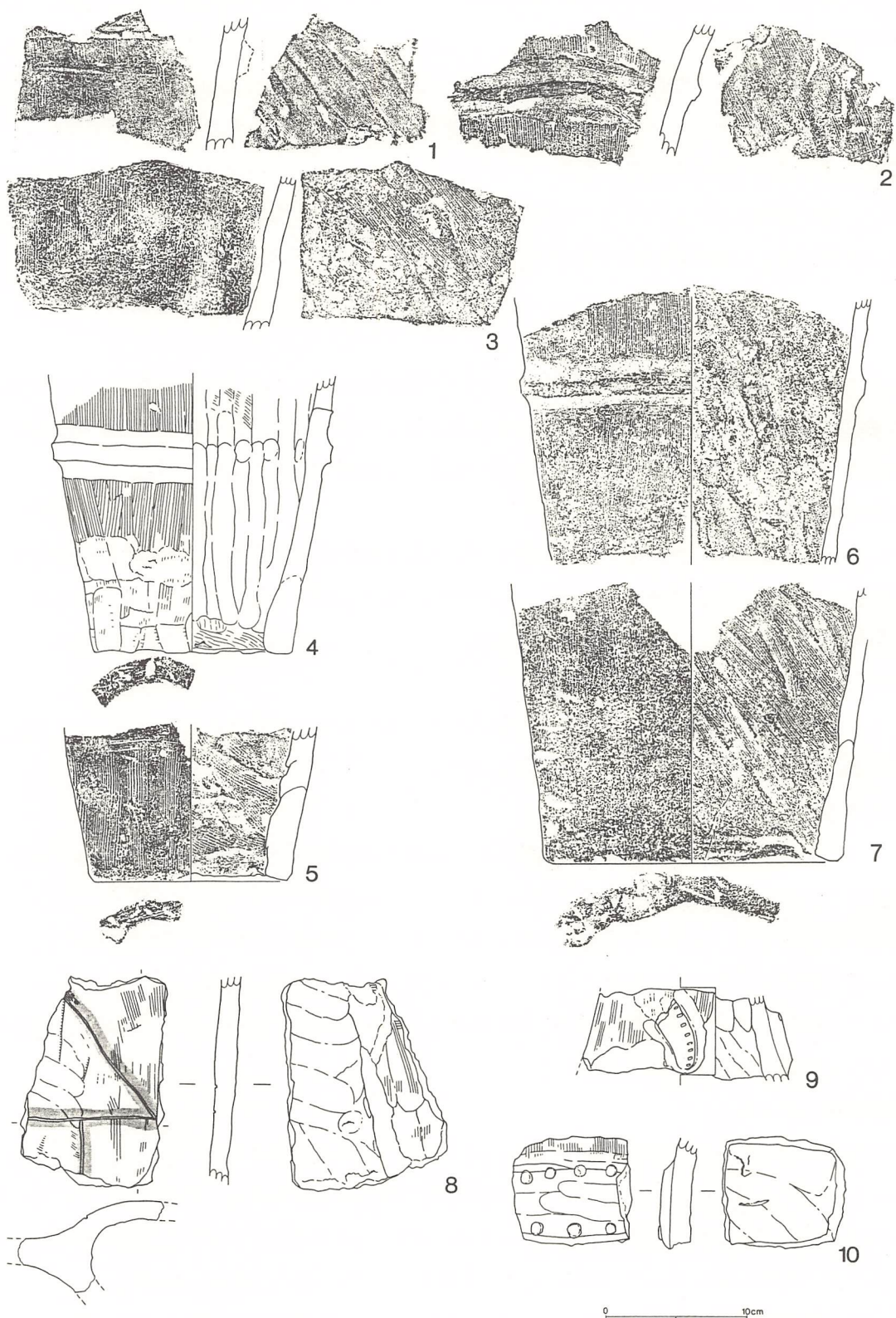
円筒埴輪（第2図3）

残存率20%の小破片のため拓影図を掲載した。曲率からの復元径は下部で21.4cm、上部で25.0cmである。器肉が下部で厚くなることから見て第1段であろう。成形は粘土紐巻き上げで、接合部に器形の凹凸が目立つ。外面調整はタテハケ（工具は幅3.1cmに19条のハケメ）、内面調整は左上りのナナメハケ（工具は幅2.1cmに15条のハケメ）である。内面には粘土紐接合痕が残る。

胎土には粗砂をやや多く含み、チャート礫・白色パミス・酸化鉄粒が観察される。焼成は良好にして堅緻である。色調はくすんだ赤褐色を呈する。

円筒埴輪（第2図4）

残存率が40%あるので、反転実測を行った。復原底部径は14.2cm、残存高は19.4cmで、第1凸帯



第2図 愛宕山古墳出土埴輪実測図（1：4）

の位置は底部から14.0cmである。器形は上方へ向かって、直線的に少し開く。成形は幅5.5cm、厚さ2.1cmの粘土帯を丸めて基部とし、その上部を粘土紐巻き上げとする。基部内面には製作台の木理圧痕が、底面には篠圧痕が残る。外面調整はタテハケ（工具は幅1.9cmに15条のハケメ）であり、内面調整は左上りのナナメハケ後、縦位の丁寧なユビナデを加えて、ハケメを撫で消す。

凸帯は断面M字状で突出度はやや強い。ヨコナデ調整は丁寧である。第2段には円形透孔の一部が残る。製作技法上、注意されるのは、製作最終段階において、底部外面を横方向にヘラケズリしていることである。板押圧技法は伴っていないので、通常底部調整技法とは異なり、自重で外方にはみ出した粘土塊を削り取ったものと推定される。

胎土には砂粒をほとんど含まず、白色パミスのみが観察される。焼成は良好である。色調は淡黄赤褐色を呈する。

円筒埴輪（第2図5）

残存率が25%あるので、反転実測し拓本を貼り込んだ。底部復元径は13.6cm、残存高は10.8cmで、上端部外面には第1凸帯下側のヨコナデ痕が認められる。器形は上方へ向かって直線的に少し開く。成形は幅6.8cm、厚さ2.1cmの粘土帯を丸めて基部とし、その上部を粘土紐巻き上げとする。底面には篠圧痕が残る。外面調整はタテハケ（工具は幅1.6cmに14条のハケメ）、内面調整は左上りのナナメハケ（工具は幅2.2cmに15条のハケメ）だが、内面には接合痕が残る。

胎土には細砂を少量含み、チャート・白色パミス・輝石が観察される。焼成は半須恵質で、良好にして堅緻である。色調は外面がくすんだ乳褐色、内面がくすんだ橙褐色、器肉は灰褐色を呈する。

円筒埴輪（第2図6）

残存率が25%あるので、反転実測し拓本を貼り込んだ。復元径は下端で20.0cm、残存高は18.6cmである。上方へ向かって、器形は直線的に少し開く。器肉の厚さは平均1.0cmと非常に薄手である。第2段から第3段に相当するとみられる。外面調整はタテハケ（工具は幅2.9cmに21条のハケメ）、内面調整は左上りのナナメハケ後、斜位の丁寧なユビナデを加えて、ハケメを完全に撫で消している。凸帯は断面形が低台形状でやや丸みを帯びている。ヨコナデ調整は丁寧である。

胎土には粗砂を多量に含み、チャート礫・白色パミス・石英と微量の雲母が観察される。焼成は良好にして堅緻である。色調はくすんだ赤褐色を呈する。

円筒埴輪（第2図7）

残存率が25%あるので、反転実測し拓本を貼り込んだ。底部を伴う第1段である。復元径は底部径21.4cm、残存高は19.6cmである。上方へ向かって、器形は直線的にわずかに開く。非常に薄手の造りで、器肉の厚さが平均1.0cmしかないのは第2図6と近似している。

底面には篠圧痕と細い植物圧痕が残り、波打っている部分もある。成形は幅8.5cm、厚さ1.8cmの粘土帯を丸めて基部とし、その上部は粘土紐巻き上げとする。外面調整はタテハケ（工具は幅3.4cmに22条のハケメ）、内面調整は左上りのナナメハケ（工具は幅3.1cmに21条のハケメ）である。接合痕は見えず、丁寧なハケ調整といえる。

胎土には粗砂を多量に含み、チャート・白色パミスが観察される。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

盾形埴輪（第2図8）

盾形埴輪の正面左上部分の破片で、円筒部からヒレ部分に及ぶ。成形は正面が扁平気味の円筒を巻き上げ成形し、両側と上部に粘土板を貼り付けて盾面を形成している。円筒部の上端は径が幾分すぼまり、開口している。盾面にはヘラ描き沈線で文様が描かれている。文様構成は中心に縦長の長方形を据え、その外方に接して連続三角文を配置する。沈線上には赤色彩色が施されている。

外面調整は円筒部ではタテハケ、ヒレ部ではナナメハケの後、ユビナデを加えている。原体の刺突痕から、その全幅は4.0cm、ハケメは29条であることが確認された。内面調整は斜位のユビナデである。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート・白色パミスと微量の雲母が観察される。焼成は良好にして極めて堅緻、色調は明赤褐色を呈する。

人物埴輪（第2図9）

裾の広がる人物埴輪の腰部である。残存率が30%あるので、反転実測とした。上部の復元径は11.8cmある。成形は粘土紐巻き上げによる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のユビナデで、丁寧に接合痕を撫で消している。外面に斜め方向で粘土塊を貼り付けて、刀子の鞆部が表現されているが、一部が離脱している。鞆の形状は鞆尻が尖り、全体が湾曲している。片側（刃部側）に沿って8個所の長方形刺突文が施されている。革製の鞆を縫製した状態を表現したものであろう。

胎土には粗砂をやや多く含み、チャート・白色パミスと微量の雲母が観察される。焼成は半須恵質で堅緻だが、表面が少し風化している。色調は外面が白っぽい橙褐色、内面は灰色を呈する。

器種不明形象埴輪（第2図10）

粘土紐巻き上げによって円筒部を作り、その外面に幅6.3cmの粘土帯を水平に貼り付け、さらに上下の側縁に沿って直径1.0cm弱の粘土粒を等間隔に貼り足している。鋏留めを表現したと考えられるので、鞍形埴輪の矢筒下帯部となる可能性がある。

外面調整はタテハケ（工具は幅0.7cmに4条のハケメ）、内面調整は斜位のユビナデである。胎土には細砂を少量含み、他に酸化鉄粒子・角閃石・白色パミスも観察される。焼成は普通で、色調は外面淡赤褐色、内面乳褐色を呈する。

器種不明形象埴輪（第3図1）

円筒部の側面に粘土板を垂直に貼りつけてヒレ部とする。ヒレ部の幅は上方に向かって広がっている。円筒部は上方ですぼまっており、ヒレ部との間に段差を生じている。また、ヒレ部の下端は水平にヘラ切りされている。現存長19.6cm、現存幅10.7cmあり、厚手の造りである。鞍形埴輪の上側のヒレ部となる可能性がある。

外面調整は円筒部ではタテハケ、ヒレ部ではヨコハケの後、丁寧なユビナデを加えて、ハケメをほぼ完全に摺り消している。内面調整は左上りのナナメハケ後、雑なユビナデを加えるが、ハケメや指押え痕を多く残す。

胎土には細砂を少量含み、チャート礫・白色パミス・角閃石・輝石・雲母が観察される。焼成は極めて良好で、堅緻。色調は鮮やかな赤褐色を呈する。生出塚埴輪窯跡産と推測される。

人物埴輪腕部（第3図2）

中実の腕で、手先と差込部先端を欠失する。また、縦方向に半分に分れている。現存長12.4cm、

直径4.5cmある。粘土塊を絞って成形し、体部への差込部分を指押えによって細く作っている。外面はハケ調整後、ナデを加えてハケメを摺り消している。全体に緩やかに屈曲し、直径が手先方向に向かって細くなっているため、短い手となることが推定できる。半身像に伴う可能性が高い。

胎土には小礫と粗砂をやや多く含み、チャート礫と白色パミスが観察される。焼成は良好、色調はくすんだ赤褐色を呈する。生出塚埴輪窯跡産と推定される。

鹿形埴輪（第3図3）

2片が接合して首から尻にかけての体部右側面と判明し、さらに前者と直接接合はしないが、尻孔から右後ろ足上部に及ぶ破片がある。このため復原実測を行った。現存長37.2cm、現存高20.6cmある。形態は尻が高く、背中がいったん下がってから、長い首に移行する。白色の顔料が2個所に残り、鹿子斑を表現したとみられる。白土のため、多くは剥がれ落ちてしまったのであろう。背面図に示すように、尻の上下2個所に円形の孔が開けられており、下側のものは透孔とみられるが、上側のものは尻尾を挿入するための孔と見られる。その復原値は縦径4.5cm、横径6.8cmと偏円形でかなり大きい。鹿に特有な偏平で短い尾が付けられていたことが推測される。

内外面の成形・調整痕から製作工程を復原すると、第1工程は四本の脚部を据えて、アーチ状の粘土板を腹部として、これらを固定した後に、体部下半まで成形する。脚部はタテハケ調整を施しておき、体部と合体後、体部外面はヨコハケ、内面は左上りのユビナデ調整をする。

第2工程は体部上半まで造形する。粘土紐は体部を横断するように半円形に渡し、手は首と尻の双方から入れて粘土紐の接着を図り、さらに左下がり方向にハケ調整する。外面はヨコハケ調整を施すが、その順序は背中から開始して側面方向へ及ぶ。

第3工程は尻の部分を粘土で閉塞し、首から手を差し入れて指押えを行った後、左下がり方向にユビナデを施して、ハケメを撫で消す。

第4工程は尾を挿入するための孔と円孔をそれぞれ外面から穿孔する。

第5工程は尾を製作し、孔に挿入して、首または円孔から指を挿入し、粘土を用いて固定する。また、外面では尾の周囲をナデ調整する。

第6工程は首に続けて輪積み成形で頭部を製作する。おそらく最後に、手を入れていた穴（頭頂部または口先）を粘土板で閉塞する。

ハケメ原体は2種類あって、粗い方は2cmあたり8条のハケメ、細かい方は1.6cmあたり10条のハケメが認められる。胎土には砂粒をやや多く含み、ザラつく。チャート礫・石英・金雲母・白色パミスが観察される。焼成は少し還元がかかっており、良好である。色調は橙褐色を呈する。

尻での体高は38.5cm前後と推定され、非常に小型の製作であることが留意される。

4 稲荷山古墳東方の推定小円墳址出土土師器

昭和30年頃、坂本氏が所有する水田の畦を拵えようとして30cm程度掘ったところ、この土師器が丸ごと出土したという。その地点（第4図D）は稲荷山古墳後円部の東方約200メートルにあたる。昭和44年撮影の航空写真（図版1黒丸）には、白っぽく直径10メートル前後の小円墳址らしき影がみえている。隣接して、市道の西側にも直径20メートルほどの円墳址が写っている。

土師器坏（第3図4）

須恵器坏蓋を模倣した土師器坏である。破損した口縁部小片を接合しているのみで、完形である。口径12.0cm、器高5.5cmを測る。薄手で歪みもなく、丁寧な製作である。器形は体部が深く、底部が尖り気味である。口縁部はほぼ直立し、内傾する端面を持ち、浅い凹線が巡る。体部と口縁部の境界にはヨコナデによる凹線が巡り、明瞭な段を形成している。

調整は体部外面ではヘラケズリ、体部内面は指押えとユビナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。胎土は精良で、砂粒の含有は少ないが、チャート礫・白色パミス・輝石が観察される。焼成は良好にして堅緻である。色調は鮮やかな赤褐色を呈する。

II 資料の検証と評価

報告資料を従来知られている資料と比較検討し、その特徴と位置付けを明らかにしておきたい。

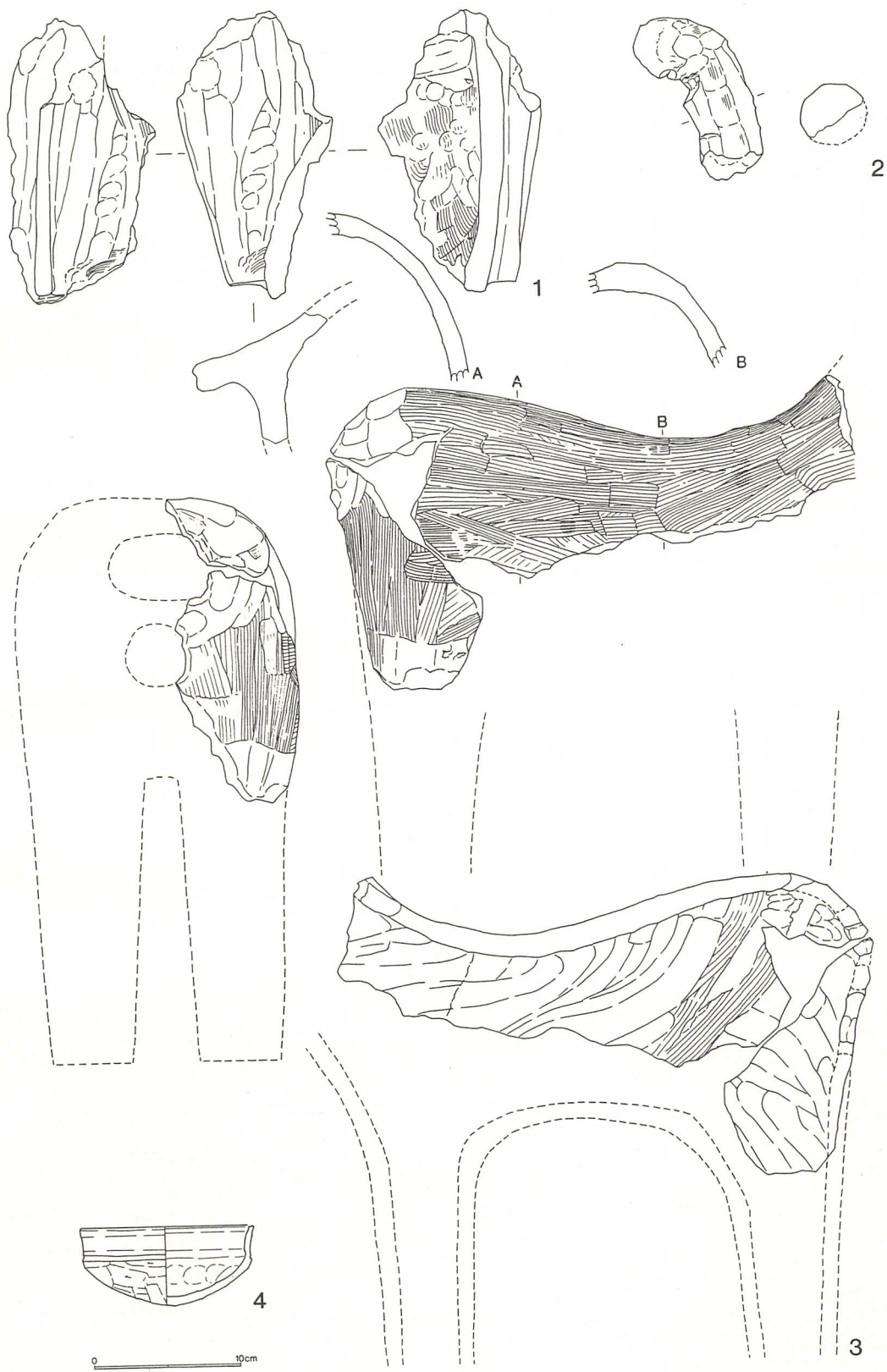
稲荷山古墳出土円筒埴輪

まず、稲荷山古墳採集資料の内、円筒埴輪について、過去の発掘調査で出土し報告されているもの（註1）と比較検討しておく。稲荷山古墳の円筒埴輪は大別すると、黄白色で半円形透孔を持つもの（A類）と、赤褐色で円形透孔を持つもの（B類）とがある。このうち、報告資料（第1図1）と類似するのは前者のうちやや小型のグループに属するもの（A2類）である。第5図1はその口縁部、第5図2は底部から体部に及ぶ資料である。まず口縁部同士を比較してみると、口縁部がわずかに開き、端部が外方に屈曲し、端面に凹線が巡ること。口縁部外面のヨコナデ幅が広いこと。凸帯の断面形が台形状で、上稜が突出していて全体の突出度が高いこと。赤色彩色が施されていること。口径（報告資料が37.6cm・第5図1が35cm）が近似すること。など共通点が多い。

逆に相違点を探すと、第5図1では赤色彩色が内外両面であるのに、報告資料は外面に限られること。第5図1では第2次調整を伴わないが、報告資料には第2次調整としてB種ヨコハケに類する調整が伴うこと。報告資料では×状のヘラ記号が認められるのに、第5図1には認められないこと。の3点を指摘しうる。この相違点についてはA類のうち大型のグループに属するもの（A1類）にB種ヨコハケを伴う例（第5図3）と、×状窯印を伴う例（第5図4）があるので、これらはA類全体のなかで選択的に行われたものとみることがきる。口縁部内面の赤色彩色の欠如は省略であろう。したがって、報告資料は稲荷山古墳円筒埴輪A2類に該当するとして誤りない。なお、稲荷山古墳円筒埴輪A2類は第5図1と2を合成して全体像を復元した場合、内面調整からみて第5段は口縁部とならないので、5条凸帯6段構成となる可能性が考えられる。この場合の復元高は約90cmとなり、第4段と第5段に透孔が穿たれていることになる。ただし、A1類のように透孔が1段おきに穿たれているとした場合、もう1段増えて7段構成となる可能性もありうる。

稲荷山古墳出土動物埴輪

次に今回の報告資料のうち、稲荷山古墳出土の動物埴輪についてかんたんに検討しておこう。発掘調査で明らかになっている資料は猪の頭部（第6図3）と馬形埴輪のたてがみ部・脚部のみである。したがって、新たに鹿または犬の頭部と馬の頭部とが加わったことになる。瓦塚古墳から犬の復元個体と鹿角が出土している（註2）ことを参考にすると、稲荷山古墳でも犬と猪を組み合わせ



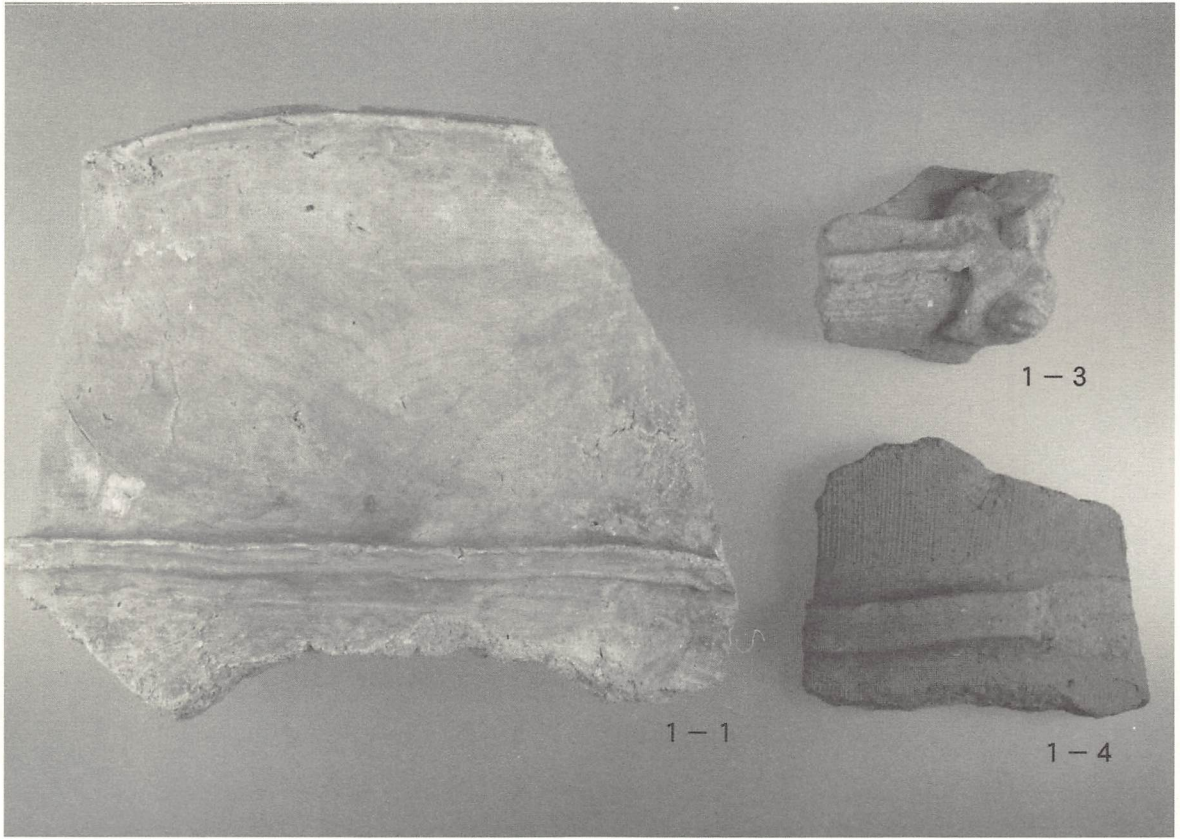
第3図 愛宕山古墳出土埴輪・小円墳出土土師器実測図（1：4）



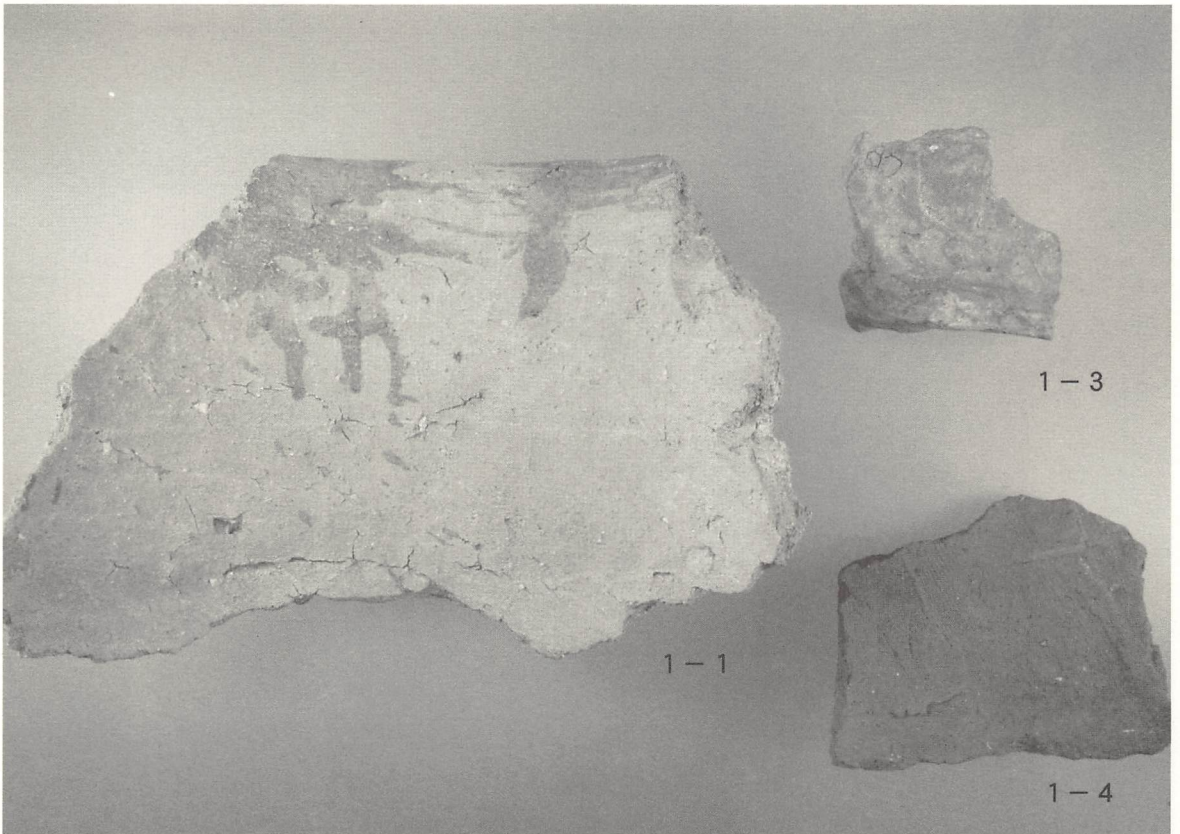
第4図 埴輪出土地点



図版1 土師器出土地点（黒丸）



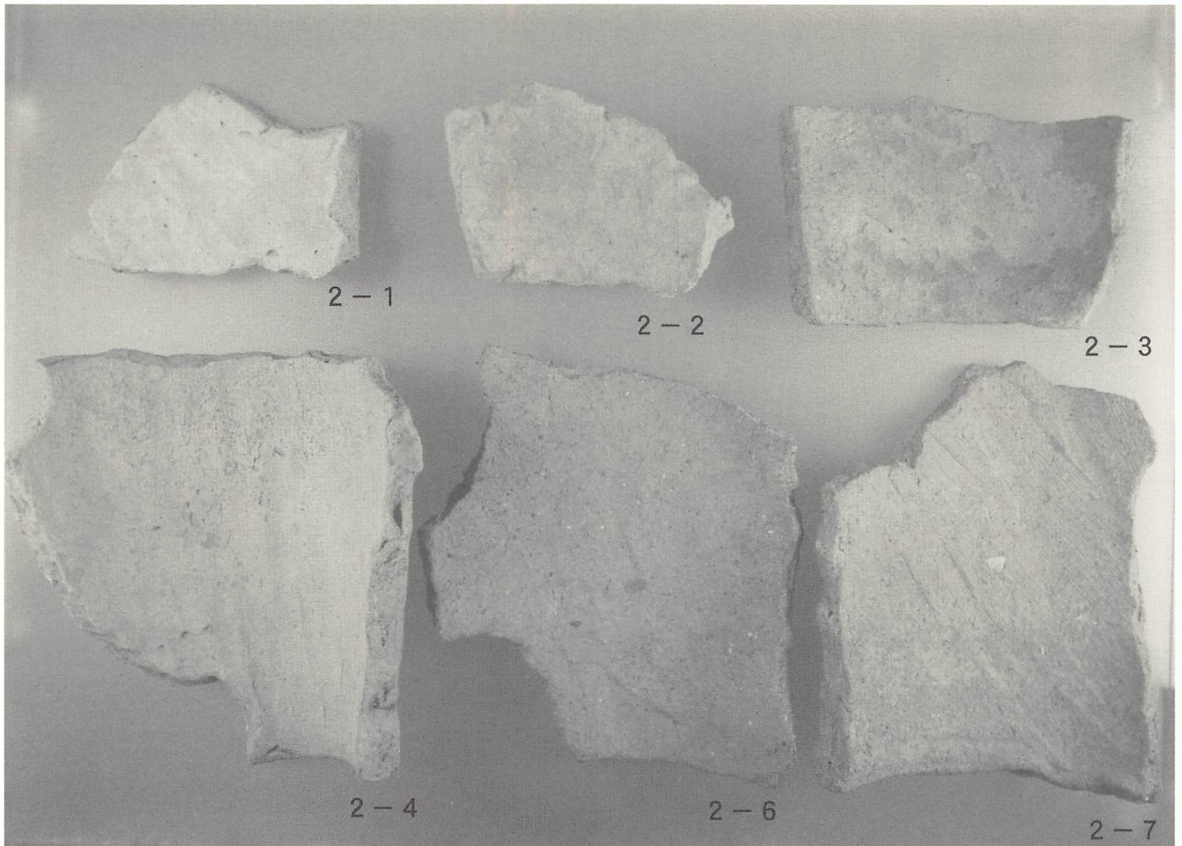
図版 2 (稻荷山円筒・馬・丸墓山円筒)



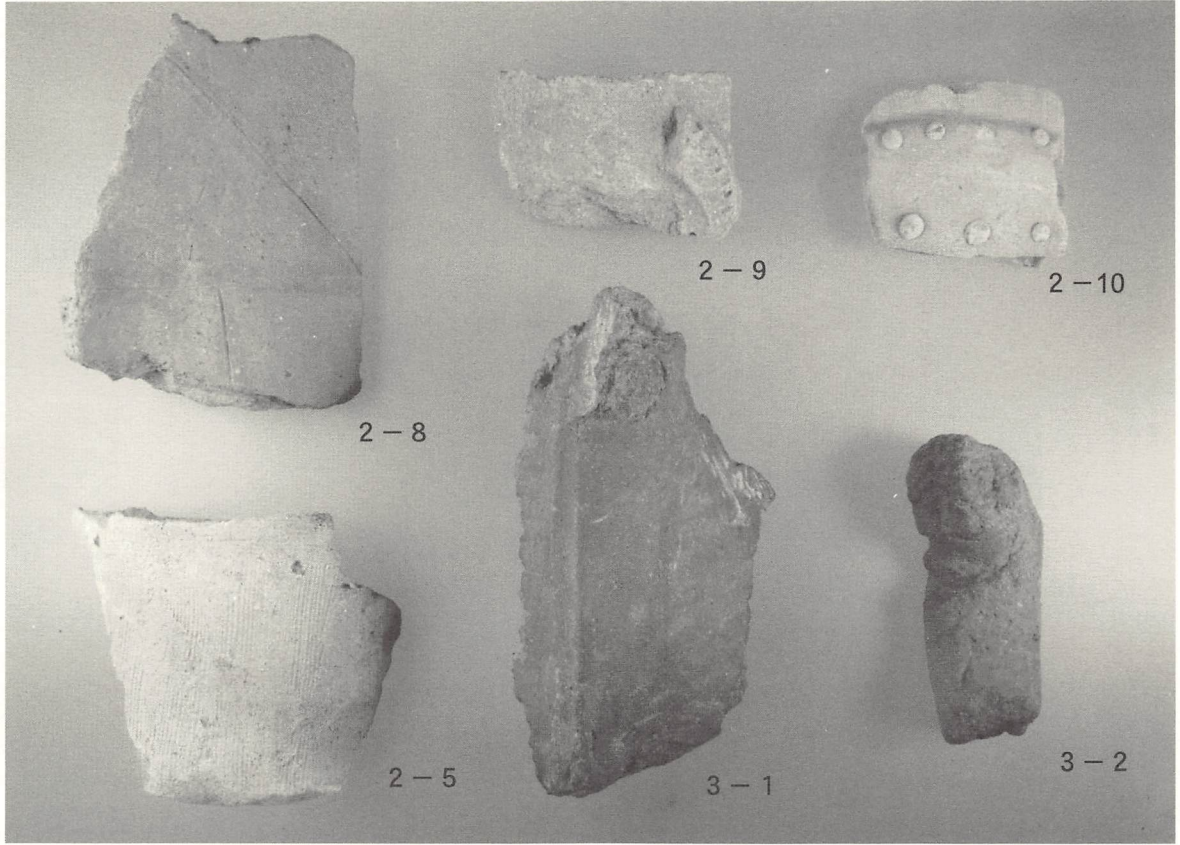
図版 3 (同上裏面)



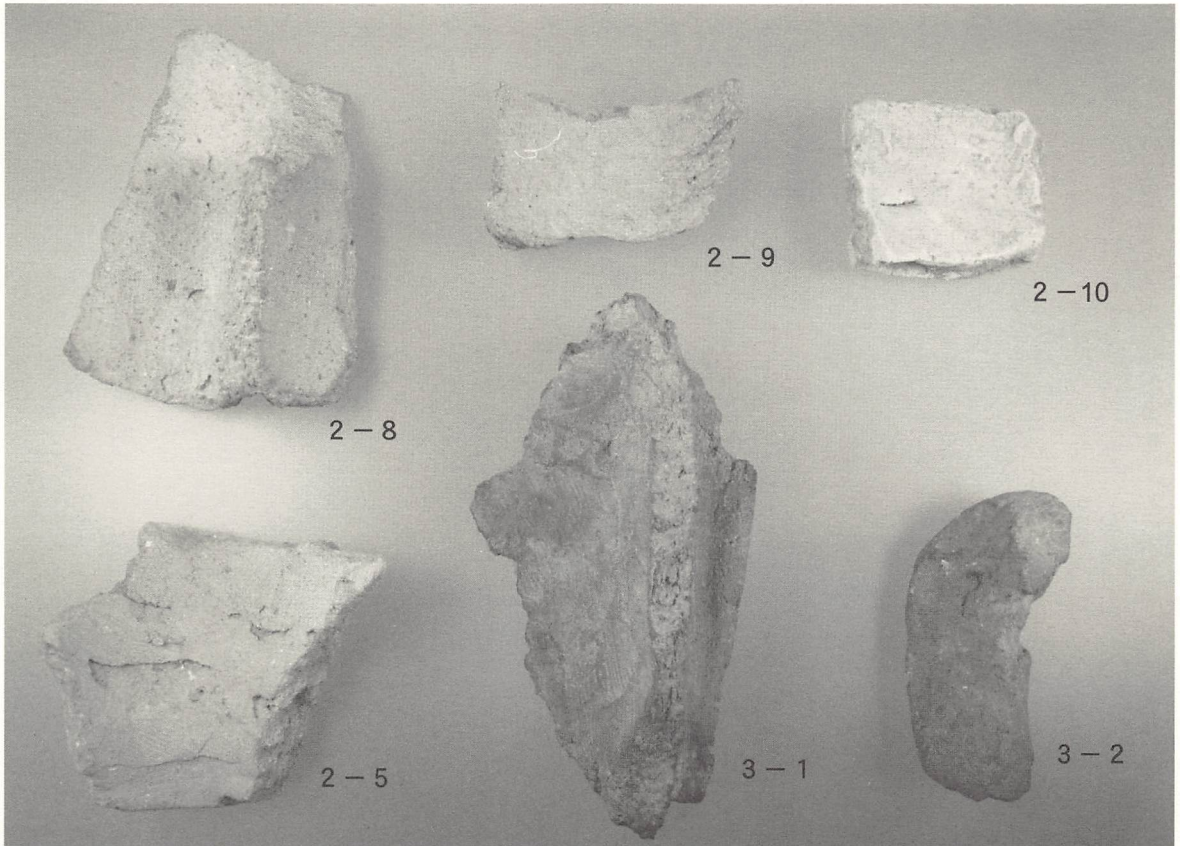
図版4 (愛宕山円筒)



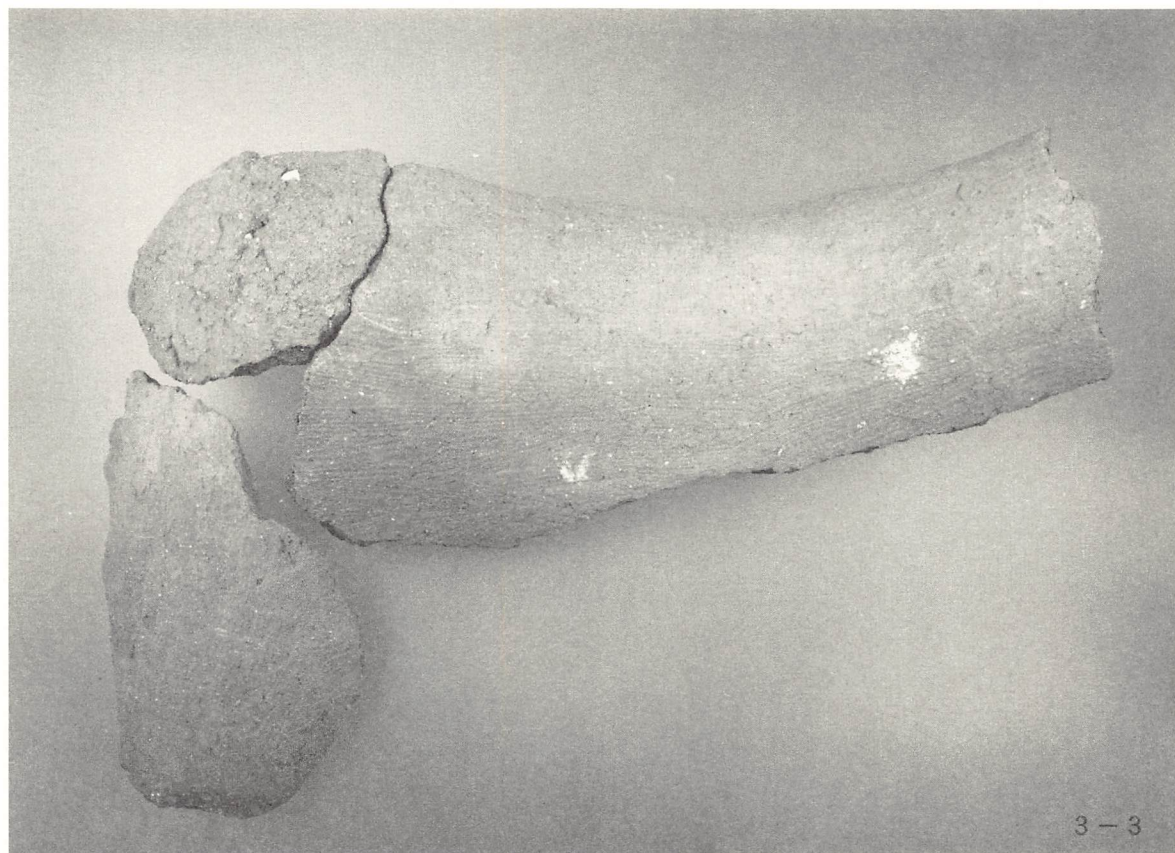
図版5 (同上裏面)



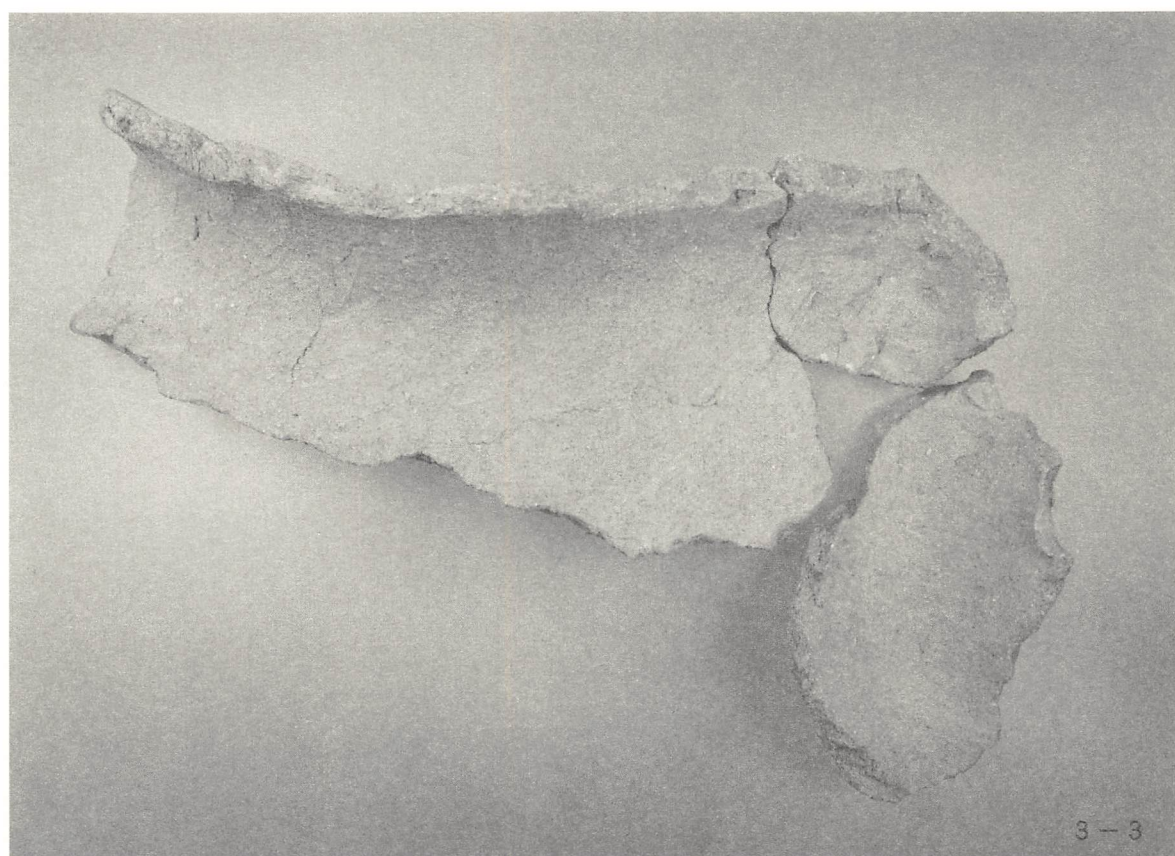
図版6 (愛宕山形象・円筒)



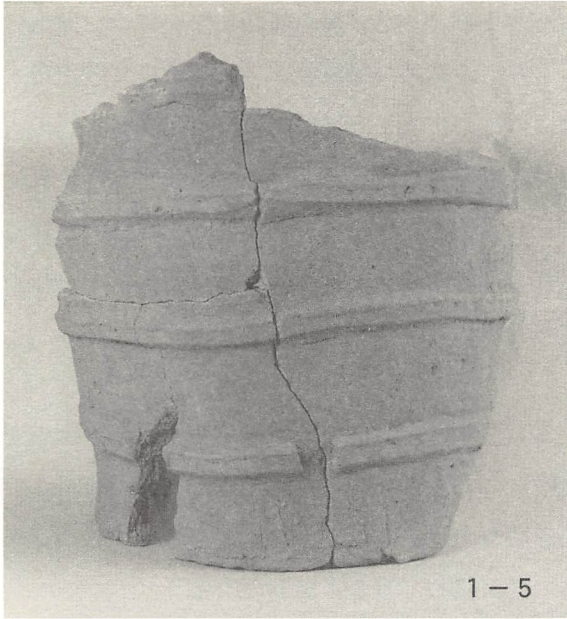
図版7 (同上裏面)



図版 8 (愛宕山鹿)

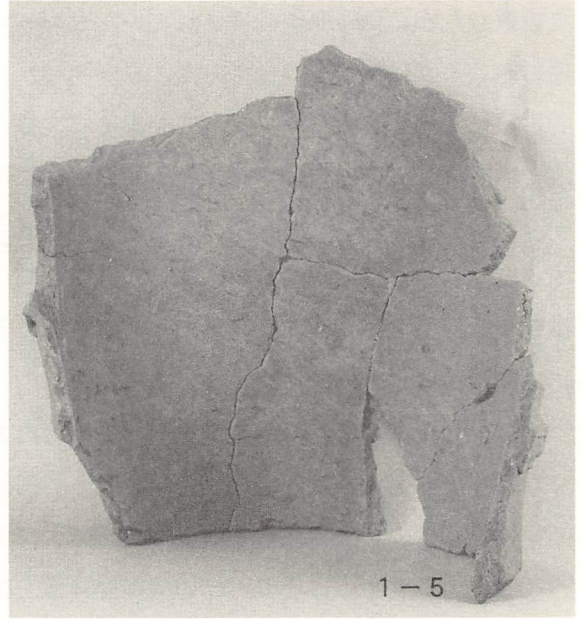


図版 9 (同上裏面)



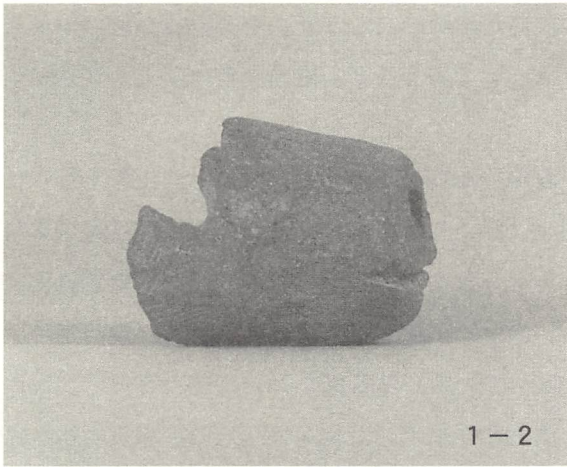
1-5

図版10 (丸墓山円筒)



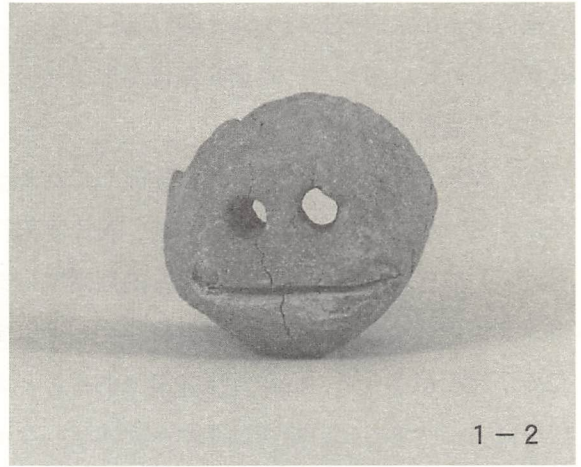
1-5

図版11 (同左内面)



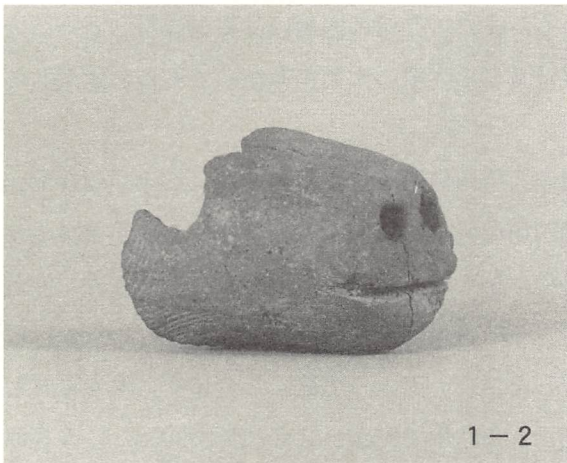
1-2

図版12 (稲荷山動物側面)



1-2

図版13 (同左正面)



1-2

図版14 (同上斜め)



3-4

図版15 (小円墳土師器坏)

て設置したか、猪と鹿が設置されていたかのいずれかとなる。また、馬形埴輪については、頭部に鈴付きのf字形鏡板をつけていたことが明らかになった。鋳造品の鈴付きf字形鏡板は和歌山市大谷古墳に実例があるが希少な型式である。大谷古墳は稲荷山古墳とほぼ同時期の5世紀後半代の古墳と考えられているので、報告資料が稲荷山に伴うとして矛盾はない。頭部の大きさからみて馬はかなり小型に製作されたものであることが推測され、もう一方の動物埴輪とも共通した特徴となっている。人物埴輪に比して動物埴輪が小さく製作されることは6世紀以降顕著となる馬形埴輪の大型化と対照的であり、5世紀代の稲荷山古墳における特徴と考えることができる。

丸墓山古墳出土円筒埴輪

次に丸墓山古墳出土の円筒埴輪を検討の対象とする。丸墓山古墳については本格的な発掘調査がなされていないために、出土資料は少なく、円筒埴輪についても全体を推測できるほどの資料がでていない。このため、報告(註3)資料はすべて拓影図である。それゆえに、今回報告する残存率の高い資料は丸墓山古墳の円筒埴輪の全体像を推測できる極めて重要な資料となる。

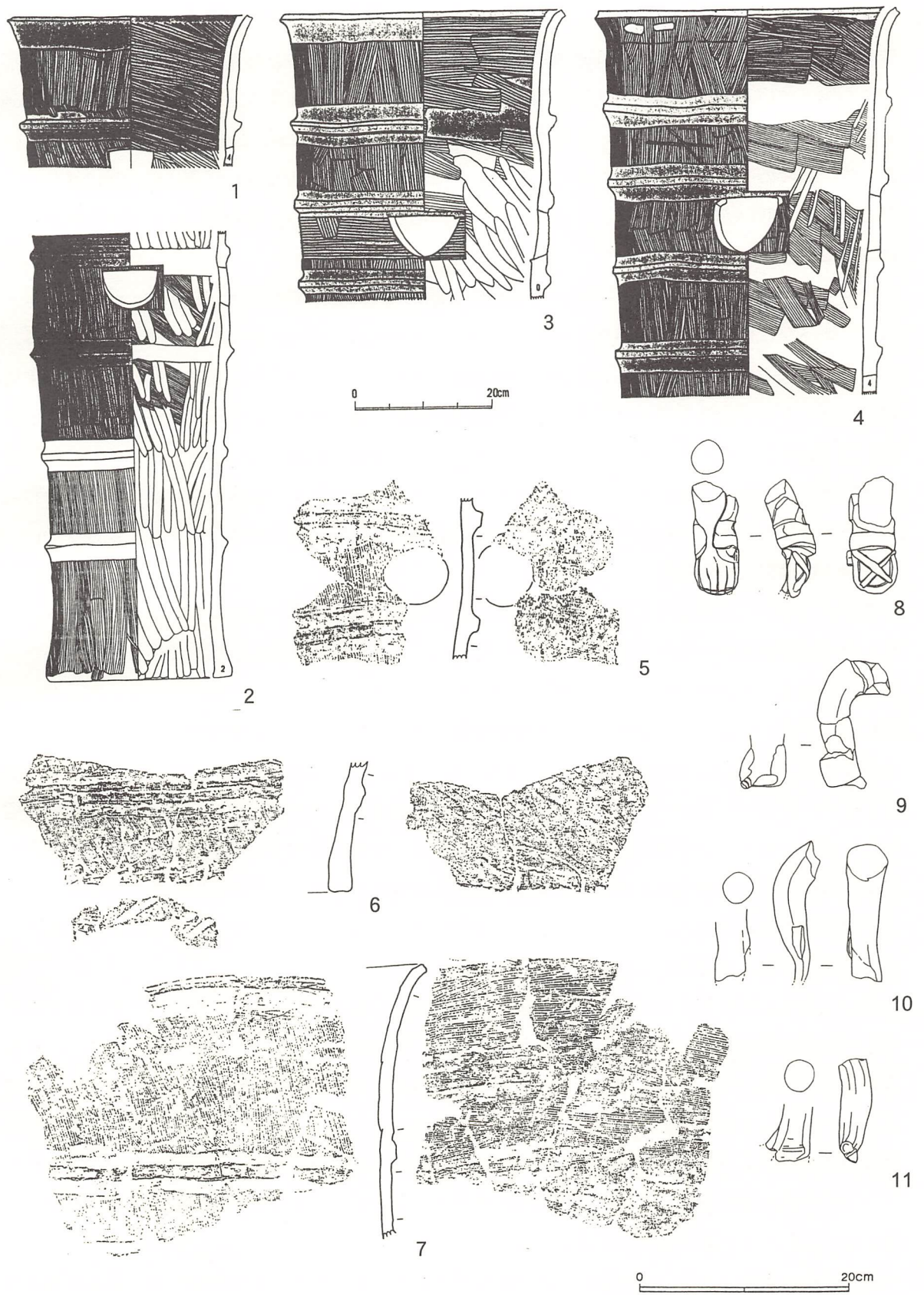
今回報告した資料の特徴は底部径が31cmあり大型の範疇にはいることと、凸帯間隔が9cmと狭く(稲荷山古墳A1類12cm・A2類15cm)、すべての段高が均等であること。第5段に小型の円形透孔が穿たれていること。外面調整は左上がりのナナメハケであること。内面調整は左上がりユビナデである点などである。

既に報告されている資料と比較検討してみよう。断片的な資料なので、部位ごとに比較を行うことにする。第5図6は底部の資料で、復原底部径33cm、第1凸帯の高さ9cmという法量は報告資料と近似している。また、外面調整と内面調整のあり方も一致している。第5図5は胴部の資料で、復原直径は47cmと報告資料の最大復原径と近似する。内外の調整も報告資料と一致し、段間が狭いため透孔が小さく、直径5cm前後であることも一致している。第5図7は口縁部の資料で、復原口径は55cmである。口縁部は緩やかに外反しながら開く器形を示し、段高は凸帯の下の段の約2倍の18cmと長い。外面調整は左上がりのナナメハケで報告資料と一致するが、内面調整は口縁部のみヨコハケである。凸帯は断面形がM字形を呈している。また、凸帯の側面には報告資料と同一の方形刺突痕がある。これらの共通性からみて報告資料は丸墓山古墳の大型円筒埴輪であると認定して誤りない。

既存資料と報告資料とを総合すると、丸墓山古墳の大型円筒埴輪は底部径30から33cm、口径55cmほどの法量があり、太さにおいて稲荷山古墳の大型円筒埴輪を凌駕するものであることが確実である。段構成については結論が出せないが、報告資料では第5段に透孔を持っており、第6段にも透孔があると仮定した場合、6条凸帯7段構成となり、その復原高は72cm前後となる。この数値は稲荷山古墳A1類の復元高が1mを超えることと比較した場合、際だって低く、全体的にずんぐりした器形となる。もし同程度の高さを想定するならば、8条凸帯で90cm、9条凸帯で99cmという復原値となる。

愛宕山古墳出土円筒埴輪

報告資料のうち円筒埴輪と推定したものを既存の資料と比較検討してみたい。埼玉県教育委員会では昭和56年度に史跡整備のためのデータを得るために、前方部南側と後円部東側の周堀部分の発



第5図 比較資料（埼玉県教育委員会調査）実測図

掘調査を実施し、同年中に行田市教育委員会も隣接する市道部分の発掘調査を行っており、それぞれ報告書（註4・5）が刊行されている。2冊の報告書によれば、愛宕山古墳の円筒埴輪は3条凸帯4段構成の小型円筒埴輪で、外面調整はタテハケのみで2次調整を欠き、第2段と第3段に円形透孔を穿っている。主に器形と法量の相違から2大別でき、A類は高さ38～42cm、底部径16～20cmを測り、格段の高さがほぼ均等のものであり、B類は高さ64cm、底部径22cmを測り、第1段が22cmあって、他段の2倍ほどの長さを有しているものである。また、凸帯はそれぞれに台形の崩れたものとM字形の低いものがあり、2分されている。第6図2はA類、第6図1はB類の代表的な資料である。

今回の報告資料と比較すると、第2図4と5は器形・内外面の調整技法（註6）・凸帯の形状・胎土・焼成などにA類との共通性を認めうるが、底部径が14cm前後しかなく、一回り小型である。しかし、従来の調査でこのような規格の円筒埴輪は出土していないので、人物や器財などの形象埴輪の台部となる可能性を考えた方がよいであろう。次に、第2図6と7を取り上げると、7は底部径が21.6cmあり、第1段の高さは19.5cm以上ある。この法量はB類のものに近似しており、内外面の調整技法・器形・胎土にも共通性が認められる。また、6はわずかに径が細いが、前記した特徴のほか凸帯にも共通性があるので、ともに愛宕山古墳円筒埴輪B類に該当するとして誤りない。

愛宕山古墳出土形象埴輪

愛宕山古墳からは過去の発掘調査によって、人物埴輪・馬形埴輪・器財埴輪が出土している。これらは主に墳丘東側の中堤上に立てられていたもので、外堀内に転落した状態で出土したものがほとんどである。今回報告するものと簡単に比較を行っておく。

愛宕山古墳から出土した既報告の人物埴輪腕部（第5図8～11）は10本ほどあるが、すべて中実製作である。このことは今回報告する人物埴輪の腕（第3図2）が中実であることと整合性をもつ。ところで、今までに知られている愛宕山古墳出土人物埴輪には眉庇付冑を被る男子頭部、振分け髪の男子頭部があり、全身像の脚部の付く円筒台もある。美豆良が8本、箆手を付けた腕が4本出土しているので、男子が最低4体あり、そのうち武人が最低2体あったと推定される。今回報告する刀子の付く人物はその武人の一員であった可能性が考えられる。なお、女子像が今のところ確認されていないので、未発掘の人物埴輪の存在は確実である。

愛宕山古墳の器財埴輪は大刀の破片3個体分と蓋の立ち飾り1点のほか、鞆のヒレ部の可能性あるもの数点が報告されている。今回鞆の矢箱下帯部（第2図10）・上部ヒレ部（第3図1）と推定される破片と盾（第2図8）が加わったので、鞆の存在がほぼ確定し、新たに盾の存在が明らかになったとすることができよう。盾は線刻文様と赤色彩色を伴っているので、水平のユビナデ数条を文様的に表現するだけの瓦塚古墳の盾よりも装飾性に富んだものであるということが出来る。ただし、方形枠の外側に隣接して連続三角文を配するものは、県内はもちろん関東地方に類例が多いので、定式化したとの評価も可能であるかもしれない。

鹿形埴輪は愛宕山古墳にも埴輪による狩猟の再現が行われていたことを確定した。瓦塚古墳と同様に犬を伴う可能性が高いであろう。筆者は、愛宕山古墳は最小規模の前方後円墳であり形象埴輪組成に欠落のあることも想定していたが、全長120mの稲荷山古墳、全長74mの瓦塚古墳と同様に狩

獏表現を具備していたことが確認された訳である。このことは埼玉古墳群の前方後円墳における埴輪祭式に一定の様式があって、古墳の規模の大小に関わらず、それが採用され、総合体として継承されつづけたことを示唆するものであろう。

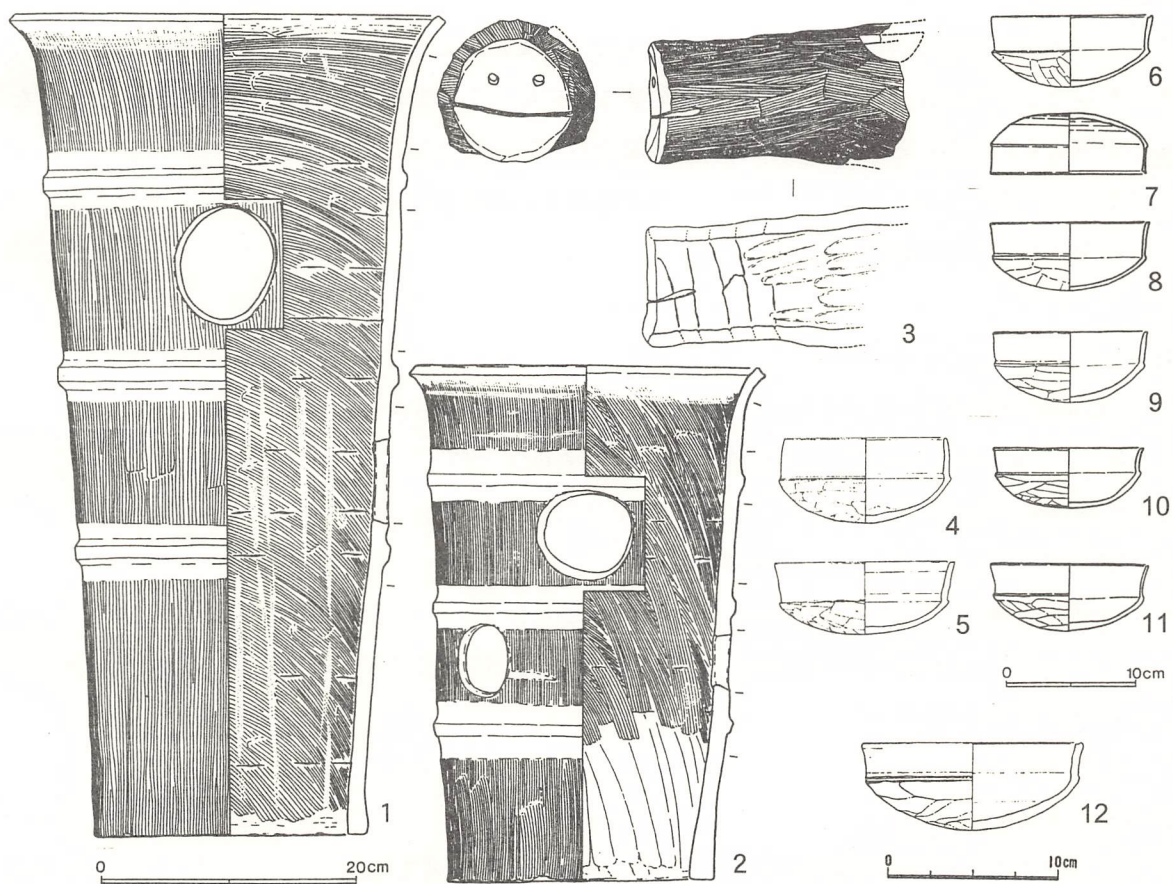
小円墳出土土師器

稲荷山古墳の周辺部には合計38基の小円墳群が確認されており、このうち、7基が発掘調査され、埴輪や土器類を出土している（註7）。今回報告する土師器坏との比較を行っておく。

直径23.5mの円墳である埼玉2号墳（梅塚）からは鬼高式古段階の坏2点と埴1点が須恵器と共に出土している。土師器坏のうち第6図6に示すものは口径12.6cm、高さ5.5cmで、口径が今回の報告資料よりもわずかに大きい。器高は同一で底部の尖る器形がよく類似している。端部が内傾し、凹線が巡るのも共通しており、内外面の調整手法も同様である。色調は橙褐色を呈する。

伴出の須恵器坏蓋（第6図7）は端面が内傾して凹線が巡り、法量や器形にも土師器坏との類似性が高いので、模倣対象＝モデルとの位置付けが可能である。陶邑編年ではI型式5段階に相当すると見られよう。

第3号墳出土の坏（第6図8）と第4号墳出土の坏（第6図9）は口縁端部に内傾する凹面の形成はなく、底部が丸みを帯びており、報告資料との差異が認められる。とくに6個体の出土があった第4号墳では器高と器形の変異幅が大きく、モデルからの乖離が窺える。また第6号墳出土の坏



第6図 比較資料（埼玉県教育委員会調査）実測図

(第6図10)と第7号墳出土の坏(第6図11)は口縁部が外湾気味に開くという形態変化を見せている。

昭和48年度の調査で稲荷山古墳から出土した坏(第6図12)は復原口径12.8cm、器高5.2cmを測り、今回の報告資料よりも少し扁平で口径が大きい、尖り気味の底部の形状と口縁部の立上り方は共通しており、端部の作りもよく類似している。古く作り出し付近から出土した須恵器群は陶邑編年のI型式5段階に相当することが知られている(註8)。

平成9年度の調査で稲荷山古墳から出土した坏(註9)は法量がやや大きく、第6図4は口径12.8cm、器高6.2cmを第6図5は口径13.1cm、器高5.2cmを測る。前者は口縁部が直立し、端部が丸く仕上げられ、後者は口縁部が外傾し、端部は水平の面を持ち、凹線が巡る。この2点は埼玉4号墳の資料との共通性が高く、製作年代は少し降るものと推定される。

以上の検討から、今回報告する土師器坏は稲荷山古墳の第1次土器祭祀及び埼玉2号墳の土器祭祀に用いられた土器とほぼ同一のもので、年代も同時期と考えてよいであろう。したがって、出土場所に周堀の残存が推定される小円墳は稲荷山古墳と同時期の古墳であった可能性が高い。このことは稲荷山古墳築造時にその周辺はかなり広範な墓域に埼玉2号墳とともに複数の小円墳群が形成され始めたことを示しており、今後の埼玉古墳群形成過程の研究に重要な手掛かりを与えたものといえるであろう。

おわりに

坂本雄誠氏の所蔵資料は偶然の機会に出土または採集されたものであるが、埼玉古墳群解明のために有益な資料であり、とくに愛宕山古墳の鹿や小円墳の土師器坏などのように従来知られていなかった資料も含んでいる。これらの資料を検証ならびに報告することができたのは筆者にとって幸運であった。報告を快く認めてくださった坂本雄誠氏に感謝申し上げるとともに、今後、本報告が広く利用されることを期待している。

註

- 1 小川良祐・増田逸朗・今泉泰之ほか『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会 1980
- 2 若松良一ほか『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会 1992
- 3 杉崎茂樹『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳』埼玉県教育委員会 1988
- 4 杉崎茂樹『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会 1985
- 5 斎藤国夫『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会 1994
- 6 愛宕山古墳円筒埴輪A類の内面調整は全面ハケメとするものが主体であるが、第1段のみ斜位のユビナデとするものが客体的に存在する。
- 7 註3におなじ。
- 8 註1におなじ。
- 9 西口正純「稲荷山古墳確認調査の概要—平成9・10年度」『調査研究報告』埼玉県立さきたま資料館 2000